



### 広島県三次市

広島県北部に位置する、人口約5万4,000人の自治体。中国山地と吉備高原に囲まれた立地から果樹栽培が盛んで、ワイナリーも存在する。ジミー・カーター米元大統領との縁が深く、同氏との縁で栽培が始まった品種「カーター・ビーナッツ」などの名物もある。

三次市は広島県でも特に水に恵まれ、果樹栽培や稲作が盛ん。その強みを生かすために作られた観光農園は、今や名所にもなっている



# 値を、農村に活力を

広島県では、温暖で雨の少ない瀬戸内地方がかんきつ類の栽培に適しているのに対し、そこから内陸に入った丘陵地帯は落葉果樹の一大産地となっている。土地の強みと、農家としての収入向上を実現する“六次産業化”の現場で、中南米からの研修員が成功のヒントを探している。

## [ 広島県 ]

## 三次市



農園の秋を彩るリンゴの収穫にいそむ研修員の岸本さん。同観光農園では、一年中何かしらの果物が実り、来園者を迎える

### ナシやブドウの一大産地 観光農園が注目集める

イチゴ狩り、ブドウ狩り、リンゴ狩り、ミカン狩り……。果樹園で旬の果物を収穫してその場で味わう習慣は昔からあったが、近年は特にこうした「味覚狩り」の体験を積極的に提供する農園が増えてきた。キーワードは「六次産業化」だ。農業は一次産業。それに、加工・製造という二次産業、サービス業という三次産業の要素を掛け合わせることで農業そのものの付加価値を高め、農家の収入向上を目指すのが六次産業化の基本的な考え方。ただ作って売るだけでなく、どう売るか創意工夫が問われる。

そんな中、年間16万人の訪問者を集める農園が、広島県三次市にある。平田観光農園の平田克明社長は、「父の農園を引き継いだとき、地域にぎわいをもたらすために必要なことを考えました。そして、農業と縁のない人にも農業に触れ合ってもらえる『観光農園』を思い立ったので」と話す。そのアイデアは、日本における観光農園の先駆けとして、後進に大きな影響を与えた。

農園を引き継ぐ前、平田さんは広島県農業試験場で果樹の研究を手掛けていた。その経験を生かして、一年中、何らかの「味覚狩り」を楽しめるように、さまざまな種類の果物を栽培。今では15ヘクタールの敷地で16種類、全180品種の果物が、訪れる観光客を楽しませている。

平田さんの取り組みは日本国内はもち

# 農業に付加価値



採れたてのリンゴを使ったアップルパイ作り。こうした体験講座が、来園者に大人気だ

ろん、世界各地からも注目を集めている。これまでに中国やインドネシアなどのアジア諸国、フランス、ドイツといったヨーロッパなど、海外から100人近くの研修生が平田観光農園を訪れ、その経営手法を学んだ。国内の研修生や学校の体験学習なども含めると、年間約3000人が同農園で農業を学んでいる。

この農園で、2014年に受け入れを始めたのが、中南米の日系若手農家だ。これまでに、ブラジルとボリビアから研修員を受け入れ、3〜6カ月間、農園経営のノウハウを学んでもらっている。

### 互いの違いから学び合う 海外で研修を受ける意義

今年、平田観光農園で研修に参加したのは、日系ボリビア人の岸本夏子さんだ。ボリビアでも農業を手掛けており、日本の果樹栽培について学ぶためにJICAの日系研修制度で来日した。

「私たちは、果樹の栽培技術はもちろん、第六次産業のキモでもある『観光農業』のノウハウや、自分たちの農園だけにとどまらない農村地域全体の振興策についても、研修の中で伝えるようにしています」と平田社長は話す。実際、平田観光農園の訪問客は、味覚狩りだけでなく農園で取れた果物などを利用した料理を味わい、草木染やスイーツ作りなどを体験することができる。また、おみやげも園内で採れた果物の他に、それら加工したジャムやドライフルーツ、スイーツなどをそろえており、作物に付加価値

を与える『六次産業化』の目に見えるサンプルとなっている。

岸本さんは、「この農園での研修で学んだように、消費者との交流を一つの『商品』として成立させるのは、ボリビアでも実現できそうな面白い取り組みだと思います」と語る。「農業を体験する」という形にならない価値を来園者に提供するというアイデアには、ここに来るまで気付きもしませんでした」

一方で、平田社長と岸本さんがそれぞれ研修を通して気になったのが、経営者としての視点だという。「一緒に働いた日本人の人たちを見ていて、とにかく勤勉なことには感心しましたが、同時に経営に対する意識が薄いのではないかと、と思うことがありました」と岸本さんが語る。一方で、平田社長は「中南米から来る研修員の皆さんは農業技術を学ぶことに関しては強い学習意欲を持っていますし、農村振興・地域活性化についても熱心に聞いてくれます。何より、日本人は経営に対する情熱が足りない」と言われたことに驚きました。彼らは、農園経営の手法についても、とにかくハンタグリに学ぼうとするのです」とかみ締める。

「経営者としての農家」という強い思いと意欲。平田社長は、中南米の研修員から、それを改めて学んだという。研修員を受け入れるといっても、技術やノウハウなどを一方的に伝えるだけで終わるのではない。「国際協力を通じて、違う環境で生きてきた人たちが互いに学び合い、理解し合って、共に成長するのが理想の姿だと考えています。私たちの農園



日本はもちろん、世界中から研修員が集まる。民家にホームステイしながら、観光農園のノウハウを学ぶのだ

では日本の研修生も海外からの研修員たちと一緒に学び、交流を深めています。その経験が刺激となって、海外での学びを目指す人が一人でも多く出てきてくれればと思います」

一方、岸本さんも、「日本の若い人たちにも、ぜひ国を出て、海外で研修を受けてみてほしいと思います。技術だけではなく、さまざまなことを学べるはずですよ」と強調する。

帰国後はボリビアで観光農業を導入し、付加価値の高い農業を実践していきたいと語る岸本さん。農業は日系ボリビア人をはじめ、中南米の日系移民の多くが従事し、成功した分野でもある。日本と中南米、互いの文化が再び交わることで、新たな可能性が生まれそうだ。



朝礼前に集まったスタッフたちと。広い農園にレストラン、体験施設など、かなりの大所帯だ